

〈いむ〉とは漢字で「忌む」とも「齋む」とも書く。宗教学者の岡田重精は〈いむ〉に「齋忌」と漢字をあて、法学者であり神道学者でもあった穂積陳重は「諱研究」で〈いむ〉の意味を「神聖」「忌避」「禁戒」の三つに分類してゐる。

辞書的な意味としては、「齋」とは「神聖な」「清浄な」を指し、「忌」は「不浄なものなどを恐れ避ける」と説明されるが、この二つの意味が厳格に区別されて用ゐられてゐる訳でもない。つまり、〈いむ〉といふことばには超自然的な神聖なものと不浄なものに対して畏怖し、憚り、あるいは回避するといふ意味が含まれてゐる。

〈いむ〉こと―畏敬と恐れ

森 謙二



神聖なもの の 典型は、共同体（Ⅱコスモス）の〈神〉であり、その象徴であると言つても良い。このコスモスを混沌とさせる典型的なものが〈死〉であり、犯罪である。コスモスの秩序を混沌とさせる力オスが不浄と呼ばれることになる。〈いむ〉ことを通じ、聖なるものへの畏怖と憚り（物忌み）を教へ、不浄の力オスから〈穢れ〉が生み出されるので、その穢れを回避する方法（籠ること・祓ひ）を教へることになる。

び れ も こ

人間にとって恐怖・畏怖の対象であった〈死〉は、共同体（Ⅱコスモス）を崩すものであったし、集団に力オスが生まれることによつて穢れが発生することになる。また、個としての〈死〉は生命の涸渇を伴ふために、死者は自らが気枯れ（Ⅱ穢れ）の発生源となる。そのために、個は〈死〉を恐れ、他者に救済を求めるやうになる。この発生した穢れを拡散しないやうに配慮するのが家族・近親の親族の役割である。この行為が「葬儀

と埋葬」といふ儀礼に集約される。

個の〈死〉に際し、共同体は力オスのなかの人々や穢れに触れた人々に対して禁戒を求めると同時に、家族や近親の親族に儀礼を通じてその力オスから逃れ、コスモスの秩序に復帰する方法も用意した。「葬儀や埋葬」といふ儀礼や服喪制度もその一つである。〈いむ〉といふ現象は、〈個〉と集団（Ⅱ家族・親族集団）、共同体（Ⅱコスモス）との相

互関係のなかで展開する。

岡田重精は、齋忌の観念は近現代において潜在化しその習俗は変容しつつもなほ存続してゐると述べてゐる（『齋忌の世界―その機構と変容―』）。私は、この岡田の意見に同意しつつも、齋忌の観念は今日では、単に潜在化するのではなく、解除されてきてゐるのでないかとも思ふ。

現代では、〈死〉に際して「家族に迷惑をかけたくない」といふ言説が、死者の家族への「思ひやり」であるかのやうな捉へられて、流布してゐる。私は、この言説にもと違和感を抱いてゐた。ここには自己の死について畏れや慎むことを忘れてしまった結果、「他者の拒絶（拙著墓と葬送のゆくえ）」といふ観念、他者を容認しない姿勢が潜在するやうに思へたのである。つまり、死者は自ら墓地に歩いて行けないのであり、葬るといふ行為はつねに他者に依存しなければならぬからである。



もり・けんじ 茨城キリスト教大学名誉教授